玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要
第 11 号（2018 年 3 月）

継続的なチャットによる日本語学習者の相づちの使用の変化

船戸はるな

本稿では，日本語母語話者との継続的なチャットにより，JFL環境の相づちの使用がどのように変化するか，またその変化は口頭での会話にも現れるかを明らかにすることを目的として分析を行った。

その結果，文字チャット開始前の特徴として，学習者は母語話者に比べ相づちの使用頻度が低いこと，また母語話者は1つの発言のなかで複数の相づちを使用する傾向や，意見や感想を表す相づちが多い傾向が見られたのに対し，学習者は相づちの単独使用が多く，「笑い」や「記号のみによる相づち」といった言語的負担の少ない相づちを多用し，意見や感想を表す相づちが少ないという傾向が明らかになった。

その後12週間のチャットの継続に伴い，チャット・音声会話の双方において，学習者の相づちの使用頻度の増加，発言1回あたりの相づち使用数の増加，また，意見や感想を表す相づちの増加が見られ，母語話者の使用傾向に近づいているといえる変化が明らかになった。

キーワード：JFL，チャット，相づち，聞き手発話

1. はじめに

相づちは，日本語の円滑なコミュニケーションに欠かせない要素であることはこれまでの多くの研究で指摘されてきた。日本語教育の分野においても，相づちは重要な学習項目であると言われているが，実際の会話指導においては話し手としての能力が重視されることが多く，聞き手としての能力である相づちは，「そうですか」「なるほど」といった一部の定型的な表現が紹介されるにとどまることが多い。

特に授業外では基本的に日本語母語話者と接する機会のないJFL環境の学習者にとって，相づちのような日本語における聞き手としての行動を学ぶ機会は限られており，相づちの重要性やその多様な形態に気づくことは困難であると言えるだろう。

そこで本研究では，先述のコミュニケーション手段の中で特にチャットに注目した。チャットで使用される言葉は非常に話しことばに近いことが指摘されているが，コミュニケーションは文字を介して行われるため，電話に比べて様々な負荷が軽減され，「よりストレスの少ないコミュニケーション」（松井2004）であることが指摘されているためである。

2. 先行研究

2-1　チャットに関する先行研究

2-1-1　チャットにおけるコミュニケーション

文字を介してコミュニケーションを行うチャットでは，聴解や発音など，学習者にとっての様々な負荷が軽減される。松井（2004）は日本の大学で学ぶ韓国語学習者と，韓国在住の韓国語母語話者との間のチャットを実施した結果，文字に依存して学習しがちなJFL環境の学習者にとってチャットは「よりストレスの少ないコミュニケーション」であることを指摘した。更に，チャットを通じて学習言語でのコミュニケーションを行うことで学習者のモチベーションが高まったとしている。また Bente et al.（2008）は，チャットではさまざまな特徴が消しやすいため，「外国人同士でのやり取りもしやすい」と指摘している。

このように，チャットでは他人と対面でコミュニケーションするというプレッシャーがなく，機能的にはウェブカメラやマイクを使用することが可能な場合であっても，参加者はチャットを選択することが多いと言われている（Yus2011[(1)]）。

2-1-2　チャットで使用される言葉

チャットにおいて使用される言語は，相づちを含む「話

所属：リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科

しことばの特徴をほとんど全部持って」おり，「限りなく話しことばに近い文字言語」であると言われている（伊藤1993）。

Baron（2009）は，多くのオンラインコミュニケーションにおける言語は，技術的には書く形態をとっているが，感情を表す文字表現や機能を持った話し言葉の形態であると指摘した。

Yus（2011）は，チャットの参加者はチャットにおける行為を“write”ではなく“talk”と表現しており，チャットには多くの典型的な口頭の会話の特徴が現れていると述べた。また，そこで参加者が使用する言葉は，自身の書きことばよりも話しことばに影響を受けており，多くの話し言葉の特徴を持つ話し言葉と書き言葉の間を揺れ動く3つ目の要素[2]であり，「口語化された文章/oralized written text」「書かれた声/written voice」であると述べた。

このように，チャットは対面や電話によるコミュニケーションよりもストレスが少なく，かつチャットを含むオンラインコミュニケーションで使用される言葉は非常に話し言葉に近いことが指摘されている。

このチャットを母語話者と学習者の間で行い，学習者の話し言葉の変化を分析した研究に船戸（2012）がある。船戸は，JFL環境にある台湾人日本語学習者と日本在住の母語話者との間で行われた12週間のチャット記録を，話し言葉の重要な特徴の1つでる終助詞「ね」に注目して分析した結果，学習者の「ね」の使用が母語話者に近づいたことを明らかにした。

そこで本研究では，このようなチャットの特徴は，日常生活で母語話者と接する機会のない学習者にとって利用しやすいコミュニケーション形態であり，母語話者とチャットを継続することは，学習者の話しことばに影響を与えるのではないかと考えた。

2-2　相づちに関する先行研究

相づちの定義や表現形式についての説明や用語は研究者によって異なり，未だ統一されたものはない。下記にこれまでの先行研究の主なものを紹介し，各研究に共通する主な見解を示す。

2-2-1　相づちの定義

「『聞き手であること』にとどまっている」（宮地1959）サイン，「談話の進行を促すため，相手の話に調子を合わせる聞き手の行動」（劉1987），「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現（非言語行動を含む）」（メイナード1993）等，様々な定義があるが，堀口（1997）が指摘するように，「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現という点では一致している」と言えるだろう。

したがって本研究では，相づちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義する。

2-2-2　相づちの表現形式

堀口（1988）は「ハイ」「エエ」「ナルホド」「ソウデスネ」といった「いわゆる相づち」を「相づち詞」と呼ぶことを提案し，それら「相づち詞」だけでなく「繰り返し」「や「言い換え」も相づちと考えるべきだと述べた。また「話し手が言った部分に対する反応」であるこれらの相づちの他，「まだ言っていない部分に対する反応」として「先取り相づち」「先取り完結」を挙げた。

小宮（1986）は，堀口（1988）が「相づち詞」と名付けた表現を「感性的表現」「ハイ」「エー」「ン」など「それによって指す概念を持たず，それ自体で直接に話し手の感情を表す表現」の「感声的表現」と，「ナルホド」「ホント」のような「もとは概念を表す言語形式であるが，現在は感動詞的にも使われるような表現」の「概念的表現」に分けている。

また，笑い，うなずきなどの非言語行動を相づちに含めるかどうかも各研究によって分かれる。山本（1992），メイナード（1993），登里（1994），渡辺（1994），柳（2003）等は笑いを相づちに含めて分析し，楊（1997），Mukai（1999），窪田（2000），村田（2000）等は分析に含めていない。

岡崎（1987）は，「ひどいですねー，よかったですねー」等の話し手に対する聞き手の感想や短いコメントも「相づちの高度化」であるとしして相づちに含めた。またMukai（1999）も，相づちを，単に聞いている，理解したということを知らせる「知らせ（simple acknowledgments）」と，聞き手がどう感じたかを表示する「態度（attitudes）」に分けており，「態度」はこの「話し手に対する聞き手の感想や短いコメント」と同一であると思われる。

2-2-3　日本語学習者の相づち使用

山本（1992）は日本在住の母語の異なる9名の学習者を対象に相づちの分析を行い，「若干の例外を除けば，学習段階が上の学習者ほどあいづちの出現頻度が高くなり，あいづちの種類も増えている」と述べた。

Mukai（1999）はオーストラリア人日本語学習者（滞日

経験1年以上）の相づちを分析した結果，聞き手がどう感じたかを表す「態度」の相づちは平均15.4％しかなく，母語話者の約28.3％よりも少なかったことを報告している。

佐々木（2002）は，来日直後の台湾人日本語学習者4人と日本語母語話者との相談場面の会話を分析した結果，学習者は「聞いている」ことを表す相づちが4割であったのに対し，母語話者は理解や同意を表す相づちが半数以上を占めていたことを明らかにした。

しかし，これまでの研究はJSL環境の学習者を対象にしたものが多く，JFL環境の学習者を対象にしたものは多くない。

村田（2000）イギリス人日本語学習者10名（うち滞日経験なし3名）を対象とし，学習者の相づちの使用する機能を「『聞いている，理解しているという表示』と感情･態度の表示である『共感の表出』，『感情の表出』，『情報の追加』」に分類した。その分析の結果，「学習者の相づちは，相手の文中での聞き手の理解のモニター表示として機能している」可能性を挙げ，また，滞日経験のない初級後半の学習者は「上級学習者に比べて聞き手としての働きかけがずっと少ない」と述べている。

柳（2003）は，滞日経験のない台湾在住の日本語学習者を対象に，面識のない日本語母語話者との電話会話を分析した結果，母語話者は敬意の高い「ハ系」の相づちをもっとも多く使用するのに対し，学習者は敬意の低い「ン系」を多用している傾向を明らかにした。

しかし，学習者のチャットにおける相づちの使用実態を明らかにした研究や，チャット継続によるその変化を明らかにした研究は，管見の限りない。そこで本研究では，母語話者との継続的なチャットによるJFL環境の学習者の相づちの変化を分析し，さらにその変化が口頭での会話にも現れるかどうかを明らかにする。

3. 本研究の目的と研究課題

本研究では，日本語母語話者との継続的なチャットによって日本語学習者の相づちの使用がどのように変化していくか，そしてその変化は学習者の口頭での会話にも影響を与えるか，という点を明らかにすることを目的とし，次の3つを研究課題とする。

研究課題1.

チャット開始初期，日本語母語話者と日本語学習者の使用する相づちにはどのような違いがあるか。

研究課題1-1.

それぞれの相づちの使用頻度には違いがあるか。

研究課題1-2.

それぞれの使用する相づちの種類にはそれぞれどのような特徴があるか。

研究課題2.

日本語母語話者との継続的なチャットにより，チャットにおける日本語学習者の相づちの使用はどのように変化するか。

研究課題3.

音声会話における日本語学習者の相づちの使用に，研究課題2。と同様の変化は現れるか。

4. 研究方法

4-1 本研究における相づちの定義

堀口（1997）を参考に，「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」とする。

4-2 本研究における相づちの分類

先行研究を参考に，下記の表1を基に調査資料を分析する。なお本研究のチャット資料については，「記号のみによる相づち」を追加した。チャットにおいては，話し手の発言に対し聞き手が記号のみで反応を示す例が多く，これも，本研究における相づちの定義である「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」という役割を果たしていると考えられるためである。

4-3 調査の概要

本稿におけるチャットとは，いわゆるインスタントメッセンジャーと呼ばれるものであり，オンラインで不特定多数の参加者によって行われるものではなく，特定の参加者と一対一で行われるものである。

本調査は，台湾在住の中国語母語話者日本語学習者（以下NNS）10名，日本在住の日本語母語話者（以下NS）10名の2人1組，計10組を対象に行った。NNSは全て，日本での長期滞在経験がなく，また日常生活で日本語母語話者と会話をする機会のない日本語学習者である。またNSは全て，日本の大学に通う10代後半～20代前半の女子学生であり，各組のNSとNNSの間に面識はない。各NNSの日本語能力等については，下記の通りである。

各組に1週間に1回，約1時間のチャットを計12回行ってもらい，1回目の前，6回目の後，12回目の後に，約15分のskypeでの音声会話の録音を行った。会話の開

表1　本研究における相づちの分類

相づち詞	感性的表現	それによって指す概念を持たず，直接に話し手の感情を表す表現
	概念的表現	もとは概念を表す言語形式であるが，現在は感動詞的にも使われるような表現
繰り返し		話し手の発話の一部または全部を繰り返すもの
言い換え		話し手の発話の内容を自分の言葉で表現するもの
先取り完結		先取りしたことを言葉で表出するもの
先取り相づち		頭の中で先取りしてそれに対して相づちをうつもの
その他（意見・感想）		話し手に対する聞き手の感想や短いコメント
笑い		音声による笑い，あるいは文字で笑い声を表すもの
記号のみによる相づち（チャットのみ）※		話し手の発言に対し，記号または顔文字のみを送信して反応を示すもの

※は筆者が追加した項目

表2　NNSの属性

	年齢	性別	職業	旧日本語能力検定試験
NNS1	20代前半	女性	会社員	2級
NNS2	10代後半	女性	大学生	3級
NNS3	20代前半	男性	大学院生	3級
NNS4	20代前半	女性	大学生	2級
NNS5	20代前半	男性	大学生	1級
NNS6	20代前半	男性	大学生	1級
NNS7	20代前半	女性	大学生	3級
NNS8	20代前半	女性	研究員	2級相当(大学内の模擬試験)
NNS9	10代後半	女性	大学生	2級
NNS10	20代後半	男性	大学院生	1級

始・終了や，話題の選定などはすべて対象者の間で自由に行われた。

4-4　分析方法

前節の調査で得られたデータを，以下の手順で分析を行った。

(1) チャットログ，音声会話の文字化資料に現れた相づちを抽出し，全NNSの各回における使用頻度を算出。

なおNNSとの比較対象として，NSの1回あたりの相づち使用頻度の平均を算出した。

(2) (1) で抽出した相づちについて表1に基づいてコーディングを行い，使用された相づちの中に占める割合を算出。

本研究では，下記の場合を除き，1送信を1発言としてカウントした。

①1回で送信された発言の中で，末尾以外にも句点・感嘆符・顔文字が含まれる場合は，その句点・感嘆符・顔文字を文の区切りとする。

（会話例1：2発言としてカウント）

1503　NS2　　普通の会社に入ることも考えてます。
　　でも，院に進みたいとも思います。

②1人の対象者が連続して送信した複数の発言の間に，主述の対応関係がある場合，連続した1発言とする。

（会話例2：1発言としてカウント）

1003　NS1　　自分ではうまく言ってるつもりなんだけど，

1004　NS1　　先生には全く違うように聞こえるみたい＾＾；

5. 結果と考察

5-1　チャット開始初期におけるNSとNNSの相づちの使用

本節では，研究課題1「チャット開始初期，日本語母語話者と日本語学習者の使用する相づちにはどのような違いがあるか」の結果について述べる。

5-1-1　チャットにおけるNSとNNSの相づちの使用回数と使用頻度

NSの1回あたりの相づちの使用総数はチャット402回／音声会話780.7回，相づちを使用した発言の総数はチャット250.3回／音声会話425.0回であった。すなわちNSは，相づちを打つ発言1回につき，チャットで平均1.6回，音声会話で平均1.8回を使用している。これに対しNNSのチャット・音声会話の各1回目は，相づちの使用総数はチャットで142回／音声会話322回，相づちを使用した発言の総数はチャット1回目133回／音声会話1回目273回を使用であり，相づちを打つ発言1回につきチャットで平均1.1回，音声会話で平均1.2回を使用している。このことから，NSは下記のように，1つの発言の中で複数の相づちを使用する傾向があることがわかる。

（会話例3：文字チャット）

NNS2　△△は○○君のニックネーム＾＾　役の名前は××です＾＾

NS2　あっそうだったぁ！　××君でしたね！思い出しましたw

NS2　私よりはるかに詳しいですねw流石です☆

以下図1・2は，全NNS1回目のそれぞれの総発話文数に対する相づちの使用された発言の割合と，全NSの1回あたりの同割合との比較を表すグラフである。

これらの図から，チャット・音声会話ともに，NNSはNSより相づちの使用頻度が低いことがわかる。またNS・NNSともに，チャットよりも音声会話の方が相づちの使用頻度が高い。

5-1-2　チャットにおけるNSとNNSの相づちの表現形式

使用された相づちを種類別にコーディングし，全NNS1回目の相づちの種類別使用内訳と，全NSの1回あたりの同内訳との比較をしたものが以下図3，4である。

相づち詞については大きな違いは見られないが，NNSの使用する相づちは，「笑い」が非常に多く，チャットはそれに加えて「記号による相づち」が多いことがわかる。一方,「言い換え」「先取り完結」「先取り相づち」は，

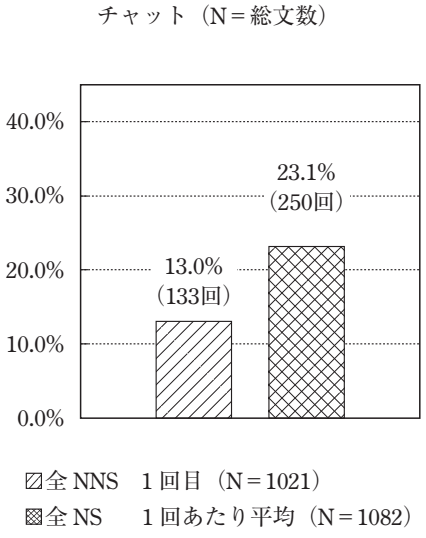


図1　相づち使用頻度（チャット）

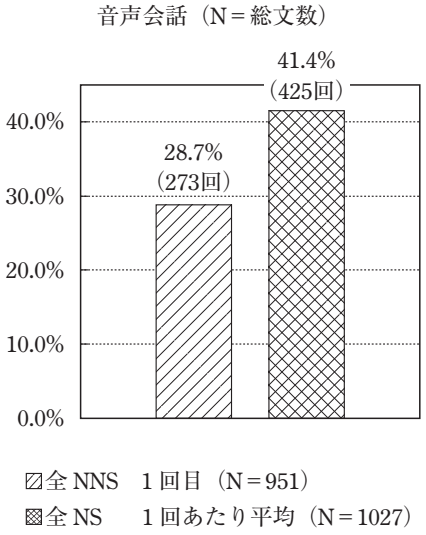


図2　相づち使用頻度（音声会話）

NNSはチャット・音声ともに1例も見られない。また，「意見・感想」もNSの半分以下である。

記号や顔文字はNSも多く使用するが，単独で使用することは1.7％と少なく，これらの単独使用もNNSの特徴の一つであると言えるだろう。この「記号のみによる相づち」と「相づち詞」「笑い」は，NNSの使用した相づちの中で約85％を占める。この原因としては，おそらく授業の中で相づちとして指導されるのは「相づち詞」が中心であり,「繰り返し」,「言い換え」,「先取り」といったものはおそらく指導される機会は少ないことが考えられる。また「相づち詞」「笑い」「記号のみによる相づち」は，それ自体の表す意図は希薄であるため，言語的な負

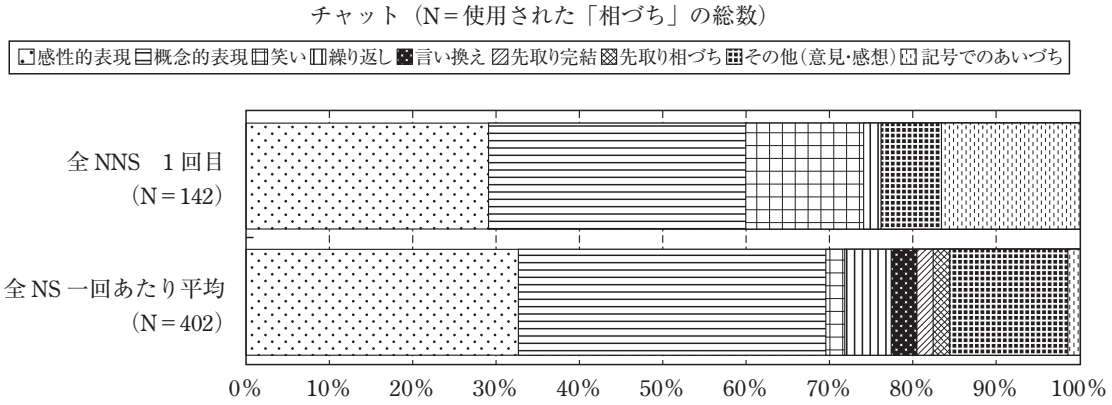


図3　相づちの使用内訳（チャット）

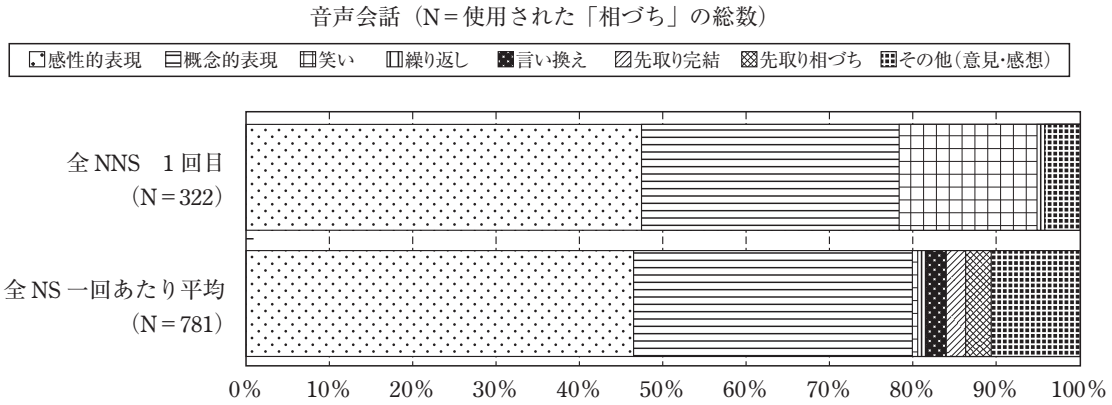


図4　相づちの使用内訳（音声会話）

担は少なく，使用しやすいこともあるだろう。しかし，これらの相づちは「情報を受け取った」ということしか話し手に示すことができず，聞き手がその話題に対してどのような意見や感想を持っているかは話し手に伝わりにくい。結果として，話し手から理解確認の発言が出るなど，コミュニケーションに不安を抱かせているような例も多く見られた。

5-1-3　チャットにおけるNSとNNSの相づちの使用傾向

5-1-1で述べたように，NSは1つの発言の中で複数の相づちを使用することが多いのに対し，NNSは1つの発言の中で1つの相づちを単独で使用することが多い。また，「はあ」「ふーん」といった，「聞いている」ということを表す相づちのみであることが多く，会話の内容に対してどのような感想や意見を持ったかが話し手には伝わらないことが多い。

このような傾向は先行研究でも指摘されており，Mukai（1999）では，英語母語話者日本語学習者は「態度」を表す相づちが少ないこと，楊（2001）では，中国人学習者は「感情の表出」を表す相づちが少ないことが明らかになっている。楊（2001）はこの理由として，「中国人は相づちで容易に自分の意見や感情，態度を示すべきではないという考え方がかなり強い」と述べているが，英語母語話者にも同様の傾向が現れていることから，これは日本語学習者全体に起こりやすい傾向である可能性があるだろう。

一方NSは，「感性的表現＋その他の相づち」という組み合わせが多く，まず感性的表現で，（賛否等にかかわらず）情報を受け取ったことを示した上で，自らの意見や感想などを表明している例が多い。

また，先節でNNSは記号のみによる相づちが多いことを指摘したが，これに対しNSの使用する顔文字や記号の多くは，他の相づち詞，特に感性的表現とともに使用されている。これは，感性的表現のみでは聞き手の見解や感情を表すことができないため，記号によってそれらを表すという補助的な役割を果たしていると考えられる。

（会話例4：）

NS4　NNS4さんも修士をでたら就職するの??

NNS4 そうですよ〜〜研究なんて興味がないので

NS4　そうなんだ（笑

このようにNSは，1つの相づちを単独使用する場合でも，発言末に顔文字や記号を使用している例が多く，NSは相づちの完全な単独での使用は避けている傾向があると言えるだろう。

5-2　チャットにおける相づちの使用の変化

本節では，研究課題2（日本語母語話者との継続的なチャットにより，チャットにおける日本語学習者の相づちの使用はどのように変化するか）の結果について述べる。

まず，NNSの相づちを打つ発言1回あたりの相づち使用数は，12回目で平均1.3回に増加した。

以下図5は，チャットにおける相づちの使用頻度の推移を示したものである。

この図から，NNSの相づちの使用頻度そのものも増加していることがわかる。

次に，使用された相づちの種類ごとの変化を見る。

この図から，「笑い」「記号のみによる相づち」の割合が半減し，代わって「意見・感想」の頻度は増加していることがわかる。

さらに，全体に占める割合は少ないものの，チャット1回目ではNNSには1例も見られなかった「言い換え」が3回，「先取り完結」が4回，「先取り相づち」が3回観察され，使用する相づちの種類も多様になってきている様子が明らかになった。

5-3　音声会話における相づちの使用の変化

本節では，研究課題3（音声会話における日本語学習者の相づちの使用に，研究課題2と同様の変化は現れるか）の結果について述べる。

前節で述べたチャットにおける変化と同様の変化は，音声会話においても観察された。まず，NNSの相づちを打つ発言1回あたりの相づち使用数は，1.4回に増加した。

次に，音声会話における相づちの使用頻度の推移を以下図7に示す。

この図から，音声会話においても相づちは増加傾向にあることがわかる。

次に，使用された相づちの種類ごとの変化を見る。

チャットと同様，「意見・感想」の増加が見られるが，「笑い」についてはあまり減少していない。また，「先取り完結」「先取り相づち」は1例も見られなかった。「言い換え」は3回見られたが，このうち2例は同じNNSによるものである。これらの原因については，やはり音声会話へのNNSへの負担の大きさが考えられるだろう。「先取り相づち」「先取り完結」「言い換え」は，相手の

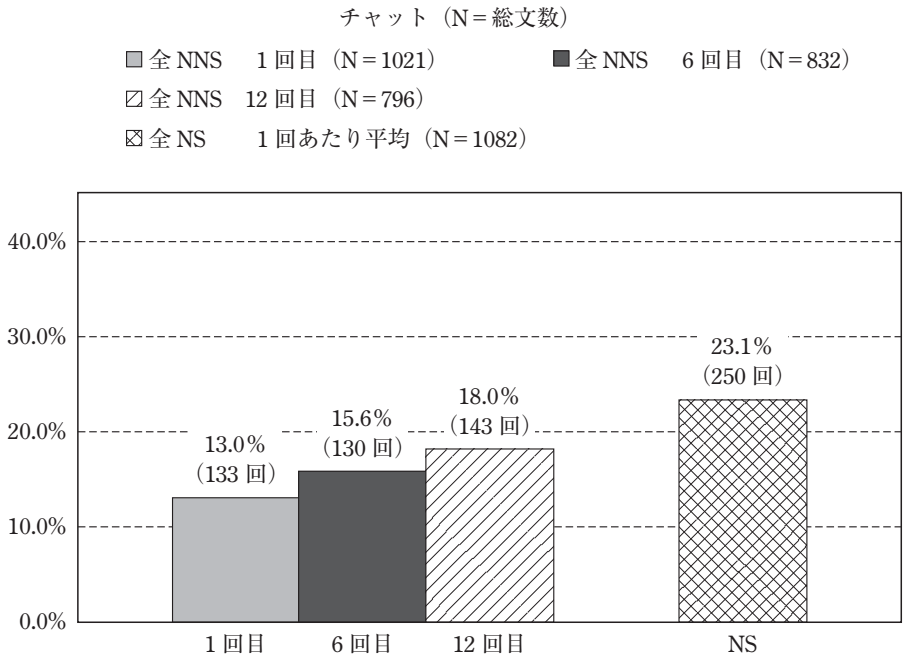
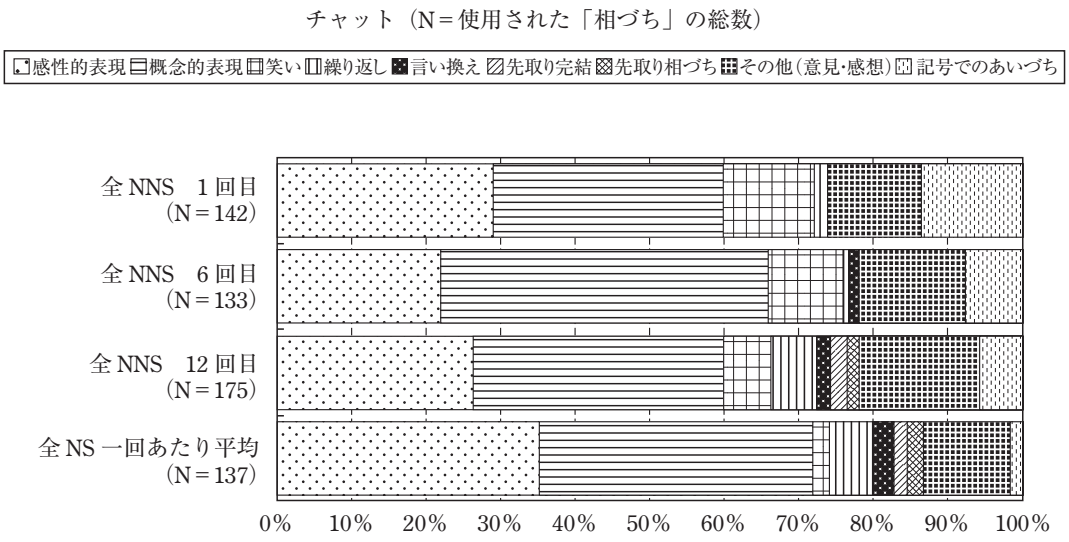


図5　相づち使用頻度　全NNS1回目-6回目-12回目比較（チャット）



感性的表現	概念的表現	笑い	繰り返し	言い換え	先取り完結	先取り相づち	意見・感想	記号のみ
41回	44回	20回	3回	0回	0回	0回	10回	24回
29回	61回	11回	1回	2回	0回	0回	19回	10回
46回	59回	11回	11回	3回	4回	3回	28回	10回
131回	147回	9回	23回	12回	7回	8回	57回	7回

図6　相づち種類別使用頻度　全NNS1回目−6回目−12回目比較（チャット）

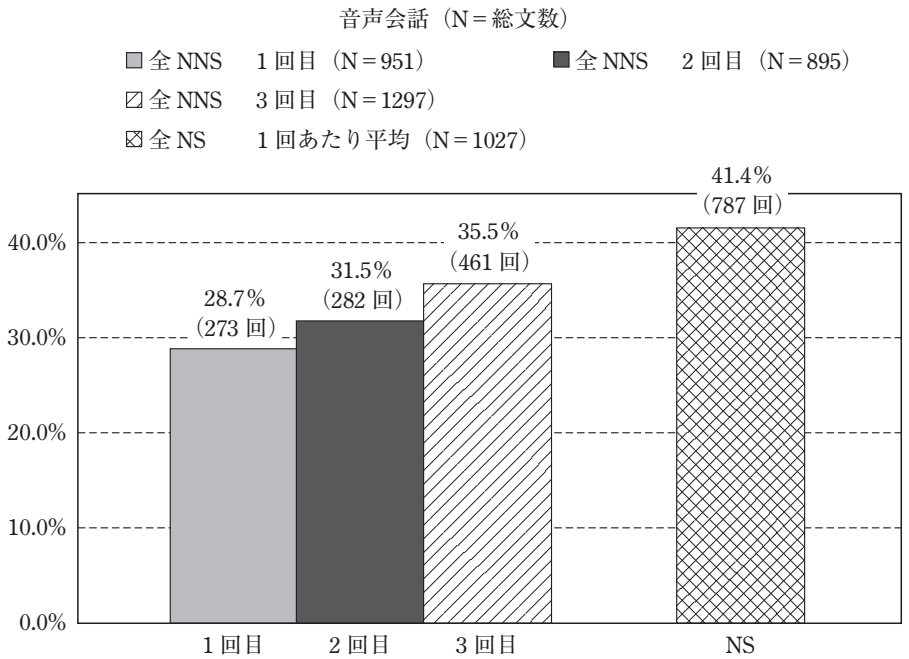
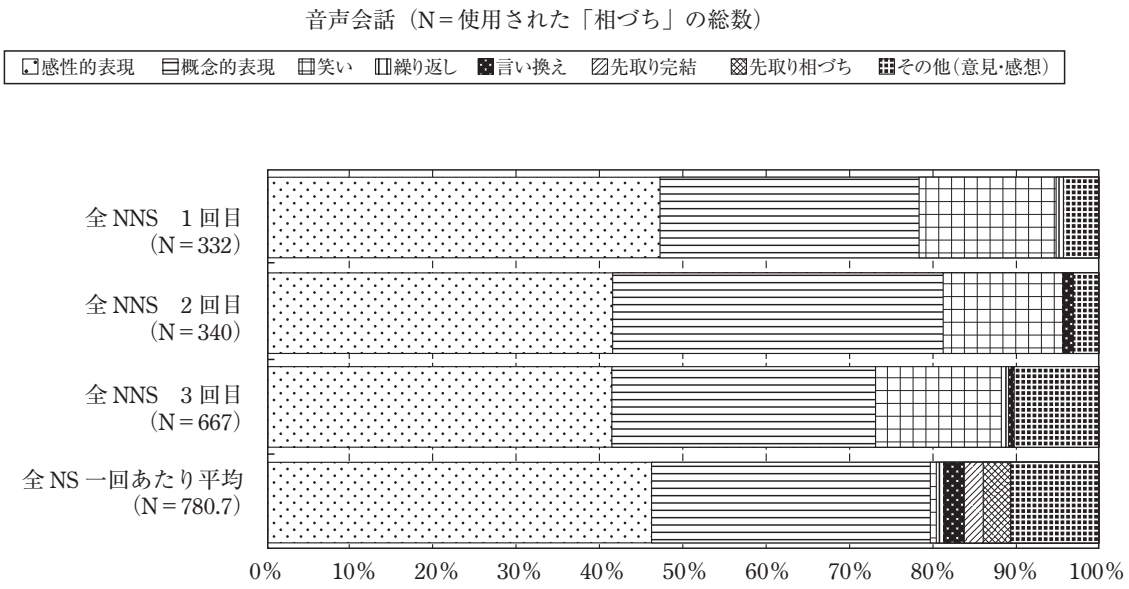


図7　相づち使用頻度　全NNS1回目−2回目−3回目比較（音声会話）



感性的表現	概念的表現	笑い	繰り返し	言い換え	先取り完結	先取り相づち	意見・感想
152回	100回	53回	3回	0回	0回	0回	14回
141回	135回	49回	0回	4回	0回	0回	11回
276回	211回	102回	6回	3回	0回	0回	69回
361回	261回	3回	8回	20回	17回	25回	84回

図8　相づち種類別使用頻度　全NNS1回目−6回目−12回目比較（音声会話）

発言の意図を正確に理解していなければ打つことができない。チャットであれば，相手の発言に理解できない部分があっても，「聴き取る」必要がないため，その語彙や文法項目を調べることが容易である上，理解してから返信するという時間的な猶予もある。しかし音声会話の場合は，まず正しく聴き取ることが必要であり，更に「調べてから返事」というような猶予はない。これらの負担から，NNSにとっては，先取りをしたり言い換えたりすることは困難だったことが考えられる。

6. まとめ

本研究では，まずチャット開始初期のNSとNNSの相づちの使用の違いを明らかにした。その結果，NNSの特徴として，

①NSに比べ，NNSは相づちの使用頻度が少ない。

②NSは1つの発言の中で複数の相づちを組み合わせて使用することが多いのに対し，NNSは1つの相づちを単独で使用することが多い。

③NNSは「笑い」「記号のみによる相づち」といった，言語的負担の少ない相づちを多用し，「意見・感想」を表わす相づちが少ない。

という点が観察された。

12週間のNSとのチャット継続後，使用頻度，相づちを打つ発言1回あたりの相づち使用数については，チャット・音声会話ともに増加が見られた。

一方，使用する相づちの種類については，チャットは「笑い」「記号のみによる相づち」といった言語的負担の少ない相づちは半減し，また「意見・感想」を表わす相づちが増加している傾向が見られた。一方音声会話では，「笑い」の減少は小さかったが，「意見・感想」を表わす相づちは大きく増加した。チャット開始初期の，相づちの頻度そのものが少なく，また使用する相づちは「情報を受け取った」ことのみを表すような相づちが大半を占めていた状況から，チャット継続後の，相づちによって聞き手の意見や感想，理解が話し手に伝えられる相づちが増加した状況への変化は大きいと考えられる。

本研究の調査対象者は，日常生活で母語話者と接する機会のない学習者である。したがって，本研究で見られた学習者の相づち使用の変化は，母語話者との文字

チャットでの会話を重ねる中で得られたものである可能性が高い。これらのことから，チャットは学習者の相づち使用に貢献したと言えるだろう。インターネット環境さえあれば，どのような場所においても利用しやすいチャットが，学習者の口頭での会話にも効果があるという可能性を示したことで，今後のJFL環境の学習者への新しい学習方法を提示する一助となれば幸いである。

注

（1）“Although it has evolved into an enhanced medium with the incorporation of webcams and sound, many users still prefer the traditional text-based utterances sent to a chat portal on the net.”

（2）“*a third element* to be added to the traditionaloral/written dichotomy, a hybrid that oscillates between the two extremes.”

参考文献

伊藤雅光（1993）「チャットと呼ばれる電子的おしゃべりについて」『日本語学』12-13，55-62

Baron Naomi (2009) The Myth of Impoverished Signal: Dispelling the Spoken Language Fallacy for Emoticons in Online Communication, in Jane Vincent and Leopoldina Fortunati, eds. Emotion and ICTs. London Peter Lang

Mukai Chiharu (1999)「The use of Back-channels by Advanced learners of Japanese: Its qualitative and quantitative aspects」『世界の日本語教育』9, 197-219

Bente, G., Rüggenberg, S., Krämer, N. C., & Eschenburg, F. (2008). Avatar-mediated networking: Increasing social presence and interpersonal trust in net-based collaborations. *Human Communication Research*, 34(2), 287-318.

Yus, FRANCISCO (2011) C*yberpracmatics*, John Benjamins.

岡崎敏雄（1987）「談話の指導―初～中級を中心に」『日本語教育』62，165-178

窪田彩子（2000）「日本語学習者の相づちの習得―日本人との初対面における会話資料を基に―」『南山日本語教育』7，76-114

佐々木泰子（2002）「相談場面におけるあいづちの機能」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究―文章・音声の母語別比較―』科学研究費補助金研究基盤研究（B）（1）研究成果報告書（研究代表者水谷信子），24-33

陳姿菁（2002）「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望」『言語文化と日本語教育増刊特集号　第二言語習得・教育の最前線』

登里民子（1994）「相づち習得の縦断的研究」『お茶の水女子大学修士論文』

船戸はるな（2012）「継続的な文字チャットによる日本語学習者の終助詞「ね」の使用の変化―必須要素／任意要素の観点から―」日本語教育152

堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64

堀口純子（1990）「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71

宮崎幸江（2003）「『聞き手』の行動をどう教えるか―サマーコース中級クラスでの指導例―」『ICU日本語教育研究センター紀要』12，45-62

村田晶子（2000）「学習者のあいづちの機能分析」『世界の日本語教育』10，241-260

メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』くろしお出版

山本恵美子（1992）「日本語学習者のあいづち使用実態の分析」『言語文化と日本語教育』，22-34

楊晶（1997）「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響」『言語文化と日本語教育』

楊晶（2001）「電話会話で使用される中国人学習者の日本語の相づちについて」『日本語教育』111，46-55

柳川子（2003）「台湾人日本語学習者の相づち表現―滞日経験のない上級学習者の場合―」『言語文化と日本語教育』

柳川子（2003）「日本語学習者を対象とした相づち研究の概観」『言語文化と日本語教育』

劉建華（1987）「電話でのアイヅチ頻度の中日比較」『月刊言語』16-12

渡辺恵美子（1993）「日本語学習者のあいづちの分析―電話での会話において使用された言語的あいづち―』」『日本語教育』82

（ふなと　はるな）